

健康高齢者の注意機能と主観的注意経験との関連

○河上実樹

(立命館大学応用人間科学研究科)

キーワード：健康高齢者，注意機能，M-EAT

The Relationship between Attentional Function measured and Subjective Attentional Experiences in the Healthy Elderly

MiKi KAWAKAMI

(Graduate School of Science for Human Services, Ritsumeikan University)

Key Words: Healthy Elderly, Attentional Function, M-EAT

目的

本研究では、実験室的な注意課題と、主観的注意経験を問う課題を実施して、その加齢変化を分析した。近年、実験室的な課題におけるエラーの気づきと日常生活におけるエラーの気づきの問題が注目されている (Harty, O'Connell, Hester, & Robertson, 2013)。そこで本研究では、健康な高齢者を対象に、刺激を見落とすような注意のエラーと主観的な注意経験に年齢差や性差があるのかどうかを明らかにすることを目的とした。

方法

調査対象者 65歳以上80歳以下の認知症ではない高齢者50名（男性25名，女性25名）が調査に参加した。参加者は全員がシルバー人材センターに登録している会員であった。平均年齢は71.46歳であり，標準偏差は3.99であった。平均MMSE得点は29.10点であり，標準偏差は1.12であった。

材料 M-EAT (modified error awareness task) と日常的注意経験質問紙を実施した。M-EATとは，パーソナルコンピュータの画面上に表示された色名と文字の色が一致しているかどうかを判断してボタン押しをするGo/No-go課題であり，エラー時には刺激が大きく表示され，ピープ音なるフィードバックが行われた (Figure 1)。

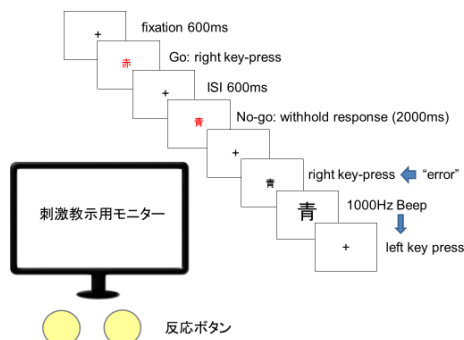


Figure 1 M-EATの基本条件

手続き 調査は1名ずつ行った。最初にMMSEを行い，その後M-EATを実施した。ボタン押しは利き手のみを使用し，視距離は約60cmであった。各条件で練習試行を行ってから本試行を実施した。練習試行は調査参加者が実施方法を理解するまで行った。本試行についてはできるだけ早く正確にボタン押しをするように求めた。課題と課題の間には10分ほどの時間を空けた。すべての実験課題が

終了したあとに，日常的注意経験質問紙への回答を求めた。調査時間は1時間から1時間30分であった。

結果

年齢(65~69歳群19名，70~75歳群18名，76~80歳群13名)と性別でデータを整理し，刺激を無視してしまうGo課題に対する誤反応数を算出した。さらに，実行機能の問題が想定される，Go刺激が表示されてからボタン押しされるまでの反応時間，No-Go課題に対する誤反応数についても参考資料として算出した。日常的注意経験質問紙については因子得点を求めた。

得られたデータを分析するために二要因分散分析(年齢×性別)を行った。分析の結果，年齢の主効果がGo課題に対する見落とし数($F(2, 44)=2.76, MSe=0.66, p<.05$)と日常的注意経験質問紙の第四因子「注意転導傾向」得点にみられた。加齢に伴い，見落とし数は増加傾向にあるが，逆に注意の転導傾向は主観的に低く見積もる傾向がみられた(65-69歳群では平均19.05だったものが75-80歳群では平均16.00に低下した)。さらに，No-Go課題に対する誤反応数($F(2, 44)=3.72, MSe=4.45, p<.05$)にも主効果が見られた。Ryan法による多重比較を実施した結果，Go課題に対する見落とし数とNo-Go課題に対する誤反応数では65~69歳群と76~80歳群の間に5%水準で有意差のあることが明らかになった。「注意転導傾向」得点では個々の群間に有意差はみられなかった。

考察

本研究の結果，実験室的な課題における注意の見落としや，日常的注意経験における加齢変化が確認された。性差に関しては，有意差は確認されなかった。年齢が高くなるにつれて単純な刺激を無視してしまうような，注意に関する誤反応が多くなっていくことが伺えた。一方で，日常的注意経験質問紙の「注意転導傾向」因子(因子得点が低いほど主観的な注意経験が少ない)では，群間に有意な差はないものの全体として加齢に伴い，注意の転導を小さく見積もる傾向がみられた。年齢が増加するにつれ，見落としなどのエラーが実際には増える一方で，自分の意図に反して，注意が適切な対象以外のものごとに向けられてしまうという感覚は減少するものと思われた。

引用文献

Harty, S., O'Connell, R. G., Hester, R. & Robertson, I. H. (2013). Older adults have diminished awareness of errors in the laboratory and daily life. *Psychology and aging*, 28, 1032-1044.

(なお，本研究はIATSS研究調査プロジェクト(1706C)の一環として行った。)